

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 17 日現在

機関番号：34416

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K12430

研究課題名(和文) 高等教育におけるグローバル人材を育成する学習環境デザインに関する研究

研究課題名(英文) A study of Learning Environment for Cultivating Global Personnel in Higher Education

研究代表者

久保田 賢一 (Kubota, Kenichi)

関西大学・総合情報学部・教授

研究者番号：80268325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高等教育におけるグローバル人材を育成する学習環境をデザインするための要件を明らかにすることである。事例としてグローバルなフィールドで働く卒業生を多く輩出するX大学を取り上げ、卒業生に対する調査から現在とつながる学習環境について抽出した。結果、大学入学前の学生個々の経験とグローバルなフィールドで働くことの接続、本当にやりたいことの問い直しの機会、意思を後押しする他者関係、グローバルなフィールドで働くための領域設定と能力形成の機会、が学習環境として重要であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is to identify design principles of learning environment in higher education in order to cultivate 'Global Personnel' who struggles in global field. As a case study, the authors focused 'X University' which has large amount of graduates who work in intercultural settings, and interviewed linkages between experiences in the university and consciousness of working in global field. The authors arrived at three conclusions in order to design learning environment in higher education: 1) linkages between individual experiences before university admission and working in global field, 2) opportunities to reflect what 'I' want to be, 3) friendship which encourage self-determination, and 4) opportunities to define which field is suitable and capacity building.

研究分野：教育工学

キーワード：学習環境デザイン グローバル人材 高等教育

### 1. 研究開始当初の背景

(1)経済・産業界からの要請を受け、国を挙げてグローバル人材育成に向けて教育改革が進もうとしている。しかし、大学の教育プログラムを見てみると、つまるところ海外留学経験があり英語が話せる人材の育成という矮小化されたものになっている。これでは、単に欧米に追いつくため、あるいはそれらの国々への適応のための人材育成に止まる。真に育成すべき人材とは、単に企業がグローバルな競争において優位に立つための人材ではなく、グローバル化という課題に正面から向き合い、そこでの課題に主体的に取り組むことのできる人材であり、本研究ではこれをグローバル人材と定義する。

(2)本研究が指すグローバル人材を育成するために大学が用意すべき学習環境を検討するため、本研究では世界を舞台に活躍している人たちに、大学時代をはじめ、人生の転機になった出来事を振り返ってもらい、グローバル化に向き合うようになった要因を明らかにしていく。また、グローバルな活動に取り組んでいる現役大学生に、現在の活動状況を振り返ってもらい、フォーマルな教育プログラムだけでなく、インフォーマルな活動を含めて、総合的に大学教育における学生の活動を俯瞰できるデータを収集し、分析していく。

### 2. 研究の目的

本研究は、高等教育におけるグローバル人材を育成する学習環境をデザインするための要件を提示することを目的とする。本研究では、実際にグローバルな分野で活躍している社会人やグローバルな活動に関心のある学生に焦点を当て、彼らに対してインタビューをおこない、大学教育のフォーマルな学習だけでなく、インフォーマルな学びにも着目し、その後の生き方への影響を明らかにしていく。

### 3. 研究の方法

(1)本研究では、グローバルに活躍している社会人とグローバルに活躍しようとしている学生を対象とする。これらの人々をインタビューし、グローバル人材像を明らかにしていくとともに、大学のどのような環境がグローバル人材を支援するための要因になっているか解明する。得られた結果をもとに、グローバル人材育成のための学習環境をデザインしていくための原則を抽出し、フォーマル・インフォーマルな環境を含め、大学教育のあるべき方向性を提示する。

(2)教育工学分野の研究は、客観主義に基づいた量的研究が主流であり、個人の中のある内向性や意欲などの変数を仮定して学習の効果を測定する研究方法論を採用する。このようなアプローチに対し、本研究は、文化心理学の考え方(ヴァルシナー 2013、コール 2002)を土台とし、特に、複線経路・等至性

モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM)(安田・サトウ 2012)を採用し、人の経験そのものを扱うことを企図する。つまり、個人がグローバル人材として成長していくプロセスを、周りの人や人工物(artifacts)との相互作用として記述していくことを特色とする。それは、個人のなかに知識やスキルを蓄積することではなく、おかれている環境との相互作用により成長していく姿を描き出すことであり、従来の教育工学研究とは異なる観点から現象を描くことができる。

(3)また、グローバル人材育成のための学習環境を多面的に分析するため、異なる PAC 分析の手法を用いた調査を行う。PAC 分析は、ある特定の事象に対し調査対象者が明確に意識していない要因間の関係性について、対話的、探索的に分析することが期待される手法である。この手法を用いることで、研究者があらかじめ想定した学習環境要因以外の諸要因と、グローバル人材育成との関連について検討することができる。

(4)本研究では、人の成長や発達を、刺激と反応の結果として捉えるのではなく、人とそれを取り巻く様々な環境とのダイナミックな相互作用の結果として立ち現われてくるものとして捉える。そうしたダイナミズムを明らかにするための複数の方法論を採用し、学習環境について考察を加えようとする。そして、その点が斬新性でありチャレンジ性である。

(5)具体的な調査方法について述べる。TEM の方法論に基づくデータ収集では、8 名に対し 2~3 回のインタビューを実施し、データを収集した。調査では、グローバルなフィールドで働く卒業生を多く輩出する X 大学で学んだ者を対象者として選定した。高等教育での学習環境と現在の取り組みとの関係を導出するために、インタビューでは幼少期から大学、現在に至るまでのライフヒストリーを聞いた。インタビューはすべて録音し、文字化したものを分析データとした。なお、1 回あたりのインタビューは 90 分から 120 分であった。分析は、質的研究手法に基づき、データの切片化、カテゴライズを繰り返しながら、「グローバルなフィールドで活動するに至るプロセスとそこでの学習環境との相互作用」を析出する作業を行った。次に、PAC 分析では、3 名に対し PAC 分析のためのセッションを実施し、クラスター化と考察を行った。

### 4. 研究成果

研究成果では、TEM と PAC 分析より得られた結果の考察を統合したものを示す。

(1)まず、「大学入学前の学生個々の経験とグローバルなフィールドで働くことの接続」が重要であった。対象者の多くは、幼少期の異文化体験などから、グローバルなフィールドで働くことを夢見ていたが、それが現実的、具体的な目標になっていないケースが多か

った。しかし、高等教育の学習環境の中で、グローバルなフィールドで働く上級生の存在を目にし、実現可能な目標であると認識するようになり、その達成のために行動するようになっていた。一方で、幼少期に異文化体験がなかったとしてもグローバルなフィールドで働く対象者もいた。そうした対象者は、幼少期より新しいことにチャレンジしながらその場ごとに自分の立ち位置を自ら設定しており、高等教育段階で経験したグローバルなフィールドでの活動経験を自らのチャレンジの機会として位置づけるものであった。この意味において、「グローバル人材＝幼少期の異文化経験」という等式は成立せず、いかに幼少期の経験とグローバルなフィールドで働くことを橋渡しする高等教育での学習経験が重要であることが分かった。

(2)次に、自分が「本当にやりたいことの問題直しの機会」が高等教育の学習環境に埋め込まれていることが重要であった。(1)で説明したように、対象者はグローバルなフィールドで働くことを夢見ていたものの、それを現実的な目標として見なしていないケースが多く見られた。なぜなら、グローバルなフィールドで働くことは、特に本研究で対象とした国際機関や海外ボランティアへの参加は、通常学生が通過する就職活動とは異なる経路で自らのキャリアを形成しなければならず、当人にとって不安をもたらすからである。しかし、高等教育の学習環境の中で、例えば教員や大学内外の他者からの問いかけなどを契機として、深く自らの将来に関するリフレクションが促されていた。そうした機会を通して、グローバルなフィールドで働くことを意思決定していた。

(3)加えて、「意思を後押しする他者関係」が構築されていることがグローバルなフィールドで活動する際の意思決定に働いていることが分かった。対象者の中には、グローバルなフィールドで働くことは、他者とは異なる生き方として誇ることができる経験として認識されていた。そして、そうした自らの経験を誇ることができるものとして認識させていた他者の存在、例えば友人や家族の存在が重要であった。他にも、同じようにグローバルなフィールドではなくとも、異なるフィールドで自分なりの働き方を模索しようとする学生が多く周囲に存在することで、自らを特別視することなく目標に向かって邁進することが後押しされていた。これらから示唆されることは、個人の意思決定やそれに基づく行動は、当人だけによって形成されるものではなく、常に他者関係の中で形成され、強化されていくものだということである。そのため、互いの意思決定に関心を持つとともに尊重し、後押しする他者関係が高等教育の学習環境内に存在していることが重要な要素であったと言える。

(4)最後に、「グローバルなフィールドで働くための領域設定と能力形成の機会」が用意さ

れていることが必要であった。グローバルなフィールドで働くためには、何らかの専門性が必要である。(1)で示したように、対象者はグローバルなフィールドで働くことを抽象的な夢としていたが、それを現実的な目標と位置づけ直すためには、同時にどのような領域において活動するかを決めなければならない。専門性がなければ、そもそも国際機関や海外ボランティアとして採用されることがないため、重要な問題である。対象者の多くは、高等教育の学習環境の中ですでに海外で働く先達の経験談を聞いたり、仕事を与えられたりする中で、所属学部やゼミでの学習や過去の自らの経験をどのように生かすことができるかを知り、その領域における専門家として必要な能力を形成していた。当然、実際に国際機関や海外ボランティアとして様々な業務に従事する中で自らの限界や新しく自分が取り組みたいことが生まれ、専門が変わっていくことがある。しかし、初めてグローバルなフィールドへと参入する際、何らかの領域設定と専門性を有していることは極めて重要である。その意味において、大学内にこのような経験および機会が用意されていることが重要である。

(5)本研究では、特に対象者を国際機関や海外ボランティアとして働いた経験を有するものに限定したため、その他の領域、例えばビジネスや外交などのフィールドで活動する者を調査することができなかった。それらのフィールドで活動するに至る経路やそこでの学習環境は、本研究で示したものと異なる可能性がある。今後の課題として、異なるフィールドにも対象を広げながら、高等教育の学習環境について検討していくことが必要となる。

#### <引用文献>

安田裕子、サトウタツヤ、TEM でわかる人生の径路：質的研究の新展開、2012、誠信書房、東京

ヴァルシナー・ヤーン、新しい文化心理学の構築：<心と社会>の中の文化、2013、新曜社、東京

コール・マイケル、文化心理学：発達・認知・活動への文化 歴史的アプローチ、2002、新曜社、東京

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

岸磨貴子、久保田賢一、大学のゼミ活動とキャリア形成：卒業生のライフストーリーから、情報研究、査読無、45巻、2017、1-22

久保田賢一、今野貴之、岸磨貴子、グロー

バル人材のライフストーリー分析からみる高等教育入学前後の経験に関する探索的研究、日本教育工学会研究会報告集、査読無、JSET17-2、2017、印刷中

上館(山口)美緒里、山本良太、関本春菜、鳥井新太、久保田賢二、複線経路等至性アプローチによる高等教育のグローバルキャリア形成過程の分析、日本教育工学会研究会報告集、査読無、JSET17-3、2017、印刷中

〔学会発表〕(計3件)

岸磨貴子、山本良太、今野貴之、久保田真弓、久保田賢二、活躍するグローバル人材の大学での経験の探究：大学から社会へのトランジションを明らかにするための方法論、日本質的心理学会第12回大会プログラム冊子、査読無、2015、34-35

鳥井新太、山本良太、井上彩子、関本春菜、久保田賢二、グローバル人材への成長プロセスに関する探索的研究、日本教育工学会第31回全国大会論文集、査読無、2015、1390-140

上館(山口)美緒里、山本良太、関本春菜、鳥井新太、久保田賢二、複線経路等至性アプローチによるグローバル人材への成長プロセスの分析、日本教育工学会第32回全国大会発表論文集、査読無、2016、425-426

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久保田 賢一 (KUBOTA, Kenichi)  
関西大学・総合情報学部・教授  
研究者番号：80268325

(2) 研究分担者

久保田 真弓 (KUBOTA, Mayumi)  
関西大学・総合情報学部・教授  
研究者番号：20268329

岸 磨貴子 (KISHI, Makiko)  
明治大学・国際日本学部・特任准教授  
研究者番号：80581686

今野 貴之 (KONNO, Takayuki)  
明星大学・教育学部・助教  
研究者番号：70632602

(3) 研究協力者

山本 良太 (YAMAMOTO, Ryota)

関本 春菜 (SEKIMOTO, Haruna)

鳥井 新太 (TORII, Arata)

井上 彩子 (INOUE, Ayako)

上館(山口)美緒里 (KAMIDATE, YAMAGUCHI, Miori)